小田原教育

第 131 号

発行日　令和2年1月 29 日
発行者　教育研究所長　石井　政道
発行所　小田原市教育研究所
〒250-8555　小田原市荻窪 300 番地

巻頭言　「不易と流行」

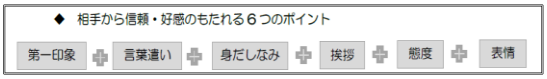
教育研究所長　石井　政道

「教育における不易と流行」という言葉は言い尽くされた感はありますが、学習指導要領の改訂や、教育現場における新しい取組が始まるとき、目の前の事象に振り回されることなく教育実践にあたるため、改めて「教育における不易と流行」について考えてみました。釈迦に説法になりますが、「不易」とは時代を超えても変わらないもの、「流行」とは時代の変化とともに変えていく必要のあるものです。令和二年度からは小学校 5･6 年生の外国語が教科として必修になります。また「特別の教科道徳」「プログラミング教育」の実践も重要です。さらに「働き方改革」の取組も学校現場に求められています。ここで別の角度から「不易と流行」を考えてみると、不易とは「教育基本法」であり、流行とは「学習指導要領」ととらえることができます。社会の変化が激しい時代だからこそ、時代を超えて変わらない基本（教育基本法）を大切にしつつ、時代のニーズに合ったもの（学習指導要領）をバランスよく取り入れていく必要があるでしょう。「不易と流行」を意識した先生方の教育実践に期待をいたします。

最後になりますが、本年度から所報「小田原教育」のページ数を削減しました。タイムリーな情報発信と、業務負担の軽減を図る、というのが大きな目的です。校務支援システムやホームページを活用し、期待に応えられるよう努めますのでどうぞご理解をお願いいたします。

研究所便り①　おだわら未来学舎

第4回おだわら未来学舎は、ホスピタリティー・コーディネーターの朝岡万吏江先生を講師にお迎えし、「接遇マナーや接遇のためのコミュニケーションについて」ご講話いただきました。



あいさつ・礼・電話の応答・敬語など、普段していることが、改めて見直してみると意外としっかりできていないことに気づきました。

今回、先生のお話を聞いたり、実際に礼の仕方を体験しながら教えていただいたりすることを通し、相手に興味をもち、尊重する心が大切なことを改めて感じました。

コミュニケーションのために、「あいさつに＋一言」

何か相手を褒めたり、気遣うような言葉を加えていくことを心がけていくとよいと教えていただきました。

研究所便り②　教育講演会

國學院大學人間開発学部教授　杉田　洋　先生

「心を育て、学びに向かう集団をつくる

－よりよい集団活動を通して－」

「令和元年度　教育講演会」を8月 22 日に開催しました。今年度、杉田先生をお迎えし、ご講演いただきました。子供たちが主体的に学校生活を送り、共に生きる力を育むためには、私たち教職員の意識がとても重要です。「競争的な手法」から「共創的な手法」へ。活動のめあてのもたせ方で、子供たちの心の成長は全く変わってしまうことを教えていただきました。子供一人ひとりをきめ細かく見取るとともに、集団作りを大切にすることで子供たちも、私たち教師も心動く学校にしたいものです。

研究所便り③　尊徳学習研修会

二宮尊徳翁は小田原ゆかりの日本を代表する人物の一人です。 尊徳翁の実績等に対する理解を深め、教職員としての資質と実践力の向上を図るとともに、尊徳学習の推進に役立てることを目的に実施しています。

今年度も8月2日に尊徳記念館において、ボランティア解説員の中山先生に講話や展示等の案内をしていただき、尊徳翁について学ぶことができました。参加された先生方の声の一部を紹介します。

- ４年生が一生懸命調べ学習をしています。私自身も学び直すいい機会になりました。
- 小田原市の教員としての自覚を改めて持つことができました。
- 二宮金次郎がなぜ「先生」と呼ばれるのかがわかりました。「心田開発」という言葉が印象に残りました。
- 自分の学校の像の形が気になっていたので謎が解けました。
- 尊徳の教えをぜひ子どもたちに伝えたいです。これからさらに学びたいです。

小さなこころみ　共同研究「ICT を活用した授業作りに関する研究」　　富水小学校　総括教諭　笹森　祐之

1　はじめに

ICTとは、「情報通信技術」と訳され、情報通信技術を利用した情報や知識の共有・伝達という意味でつかわれることが多い。教育の分野では「情報コミュニケーション技術」と訳し、ICT機器を活用した学習を指すことが多い。現在では、スマートフォンやタブレット等が普及し、インターネットに気軽にアクセスできる時代になり、ICTを教育にどのように活用するか重要視されている。

2　研究の方向性

授業の目的は子供たちの学習に対する意欲的な取組や学力の定着であるため、授業の組み立ての中でその場にふさわしい教材・教具を見極め、その選択肢としてICTがあると考えた。

1年目は教師が主体となるICTの活用、2年目には子供たちが主体となるICTの活用へと展開し、ICTを伝えるツールとして活用する授業づくりに取り組んだ。

3　ICT を活用した授業

研究用に用意されたタブレットを用いて、この 2 年間授業づくりを進めてきた。

1年目は小学校外国語活動と小学校国語で研究授業を行った。外国語活動では会話の内容を理解しやすくするための場面の提示、フラッシュカードの代わりや児童の作品を回収して提示した。国語では、見本の提示やスピーチの練習を振り返るために動画を撮影した。

2年目は中学校保健体育と小学校算数で研究授業を行った。保健体育では、ハンドボールのゲームを生徒が撮影し、それを元にチームの課題を確認し、それを補うための作戦を考えた。算数では、児童が写真に撮ったノートを提示して発表し、様々な考え方のよさを共有し、次の学習に生かせるようにした。

4　これから

これまでの授業実践や研究を通して見えてきた成果と課題については、年度末に研究冊子にまとめて報告をする予定である。

ある教室から　**「学び」のもとになるもの**　　教育指導課　指導主事　鈴木　孝宗

ある中学校の2年理科の授業を参観しました。事前にお送りいただいた指導案の「①シソチョウ」という言葉に目が留まりました。うろ覚えの知識との再会に、興味を掻き立てられます。続く言葉は、「②アカントステガ」「③イクチオサウルス」…？？　自然にスマートフォンに手が伸びていました。授業をイメージして、参観する当日が待ち遠しくなりました。

参観させていただいた授業の導入場面では、「学習のねらい」に続き上記①～③の絶滅生物に関する資料が提示されました。摩訶不思議な生物との出会いに、生徒の視線は釘付けです。この後、3～4人の班ごとに骨格形成を比較したり、生育環境を推察したりしながら現存生物との相違点や類似点を考察します。しかし、授業者の学習デザインは、考察する生物は班で1つのみとし、生徒一人一人が自分の考えを明確にできるよう時間確保を優先しています。

次の活動は、ワールドカフェ形式の意見交換です。生徒たちは、残る2つの絶滅生物を考察結果と比較して考える必要感が生まれているため、説明を聞く態度も真剣です。自分の考えと比較して問答したり、自分の考えを再構成したりする深い学びにつながっていました。

授業の残り時間もあと3分。進化の過程上の生物分類と自分の考えが異なっていると知った生徒は「くっそー！マジかぁ…」と呟くと再び資料に目をやり、チャイムが鳴っても暫くの間その場を離れませんでした。その様子を見ていた授業者の先生からの呟きは、「もう少し振り返りの時間をとりたかったぁ…」。

生徒も先生も“悔しい”という思いから主体的な学びが拡がっていく…学校ってやっぱりいいなと改めて感じた一日でした。